

あるむぜお94

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 94

2010年12月20日



鈴法寺歴代住職の墓碑（青梅市新町・鈴法寺跡公園）

目次

1-2 府中宿に〇△がやってきた！

③虚無僧寺との契約

3 博物館で生物多様性を知る！

③自然観察会の真実

4-5 ノート 都市環境に適応した鳥たち

6 展示会案内

特別展 古代国司館と家康御殿

7 最近の発掘調査

古代の国司の館を発見

8 収蔵資料あれこれ 大室政右コレクション

青梅市新町1丁目の新青梅街道沿いにある鈴法寺跡公園の一角には、鈴法寺歴代住職の墓碑がひっそりと残っています。

江戸時代、鈴法寺は普化宗の総本山でした。普化宗は禅宗の一派で、その門徒を虚無僧、寺院を虚無僧寺といいます。虚無僧寺は檀家をもたず、虚無僧は尺八を吹いて村々を回り、托鉢を行いました。鈴法寺は府中宿と契約を結び、この虚無僧の廻村を取り締まっていました。

普化宗は1871年（明治4）に廃宗となり、鈴法寺も廃寺となりました。さらに火災による類焼で建造物が消失し、現在は鈴法寺跡公園の近くにある東禅寺に移建された観音堂と扁額が、往時の姿をとどめています。

府中宿に○△が やってきました!

③虚無僧寺との契約

地域を中心である江戸時代の宿場には、多くの人や物資、情報が集まりました。府中宿にも物見遊山や商用、六所宮（現・大國魂神社）への参詣などさまざまな目的をもった人が訪れました。種々の人々が集まれば当然のことながら、中にはあまり歓迎できない面々も含まれていました。どのような人々が訪れ、府中宿ではどのように対処していたのか、4回シリーズで紹介したいと思います。

本シリーズの「①浪人・山伏・座頭・虚無僧」（あるむせお92）で浪人等からの合力の強要に対し、複数の村で協力して対処していたということをお話ししました。これは村々が自衛のために行ったことですが、今回は同様の理由から村と虚無僧寺が結んだ、ある契約についてご紹介します。

嘉永5年（1852）2月、府中宿に2人の偽虚無僧が宿泊しました。この両名は、甲州乙黒村（現・山梨県中央市）にある明暗寺の門弟を名乗り止宿しましたが、偽物であることが露見しそ



『人倫訓蒙図彙』に描かれた虚無僧（本館蔵）江戸時代中期の虚無僧。虚無僧の法器の1つである天蓋（深編笠）をまだかぶっていない。

になったのでしょうか、尺八などを置いたまま逃げ去りました。この事件について、江戸の牛込納戸町（現・東京都新宿区）にあった鈴法寺の番所（出張所）から、府中宿の役人に宛てられた書状が市内に残っています。

鈴法寺は、現在の青梅市新町にあった虚無僧寺で、千葉県松戸市にあった一月寺とともに虚無僧寺の総本山でした。両寺とも番所を江戸に置き、事務的なことはそこで執り行っていました。

鈴法寺番所からの書状には、現在甲州の明暗寺には虚無僧が一人もいないので、その2人は偽虚無僧に間違いないとしたうえで、両名が置き去った品は鈴法寺で引き受けること、この一件にかかった費用はすべて鈴法寺が支払うことが記されています。なぜ鈴法寺は、自分とは関係のない偽虚無僧の後始末をしなければならないのでしょうか。この理由は、まさに今回のテーマである、村々と虚無僧寺との契約にあるのです。

府中市に残る古文書のうち、現在の領収書にあたるものに「安楽寺留場料」と記されたものがあります。安楽寺は、上布田村（現・東京都調布市）にあった虚無僧寺で、鈴法寺の末寺でした。各虚無僧寺は、一定の托鉢場所を持っていましたが、府中は安楽寺の持場にあたります。「留場」とは、このうち托鉢に出向くことを止めている場所という意味です。つまり「留場料」とは、虚無僧が托鉢に廻村しないように、まとめて支払う布施金のことです。

鈴法寺は、虚無僧寺の総本山として、「留場」となった村々に、寺で公認した虚無僧以外の者が介入することを防ぐ契約を結びました。この契約により、本物偽物にかかわらず、虚無僧に関する問題はすべて鈴法寺で引き受け、必要であれば見廻りの虚無僧を派遣したようです。

虚無僧体の者の合力強要や暴力行為は、安永3年（1774）正月に幕府の法令によって禁じられました。しかし、武士身分の者しかねないとされた虚無僧の取扱いは、村々にとって苦慮することも多かったと思われます。ましてや偽物が闊歩すれば、負担は大きくなるばかりです。「留場料」を支払えば、虚無僧寺がこれらを取り締まってくれるというこの契約は、村が自衛のために虚無僧寺と相対で結んだもので、幕府の取締りに頼らない治安維持対策といえます。（花木知子）

博物館で生物多様性を知る！

③自然観察会の真実

植物の押し花標本^{ひょうほん}や動物の剥製標本^{はくせい}など、博物館の自然資料には、原則としてそれぞれの種名と採集地・採集日が記載されています。当館では、植物・昆虫・野鳥を中心に、府中とその周辺で採集した標本を収蔵しています。常設展や特別展で展示される数々の標本を見るだけでも、自然界に生きる多様な生物の世界が伝わってきます。また標本の採集データは、どの時期にどの場所にいたのかを示す証拠としても重要な役割を担っています。変わりゆく自然環境とともに変化する生物種を、標本を通じて考察することも可能というわけです。但し、自然を理解するためには、これだけでは不足の感があります。生物を生きた状態で観察すること、またそれらがどのような環境で、どのように活動しているのかを目にすることこそが、深い理解度を生むのだと思います。そのために博物館では野外観察の機会を設けているのです。

「自然観察会」の名称で、開館当初から25年近く続けてきたプログラムでは、色々な試行錯誤^{さくご}をしてきました。府中は、段丘^{だんきゅう}や浅間山^{せんげんやま}といった特徴的な地形を有し、さらには多摩川が南縁を流れるといった、緑が後退する東京の中にあって比較的自然而が多く残る土壌です。こうした条件を最大限に利用して、それぞれの場所で観察できる植物・昆虫・野鳥を実際に紹介してきました。基本的には発見した生物の観察が中

心になりますが、その生物の名前を覚えるだけで目的が達成されることはありません。それでも参加者の興味は、生物の名称にあるようです。数多くの種類を目の当たりにして、恐らくは種の多様性を実感することでしょう。しかしこれなら図鑑を眺めても、博物館で標本を見ても成立します。生物名を知るその先には、周囲の環境との関わりがあります。浅間山と多摩川では野鳥の種類に違いはあるのか？段丘で見た蝶はどのあたりを舞っていたのか？近くにはどんな植物が生えていたのか？季節は？天候は？…実際に見て感じ取らなければ、わからないことです。

自然界は決して単一の生物種だけで構成されていません。多くの種類が複雑に交差し、それぞれに関係を保ちながら組み上げられています。さらに生物は、多様な環境を生息場として選択し、生態系を構築します。観察の眼をもって自然を見るということは、その生物が適応している環境まで理解するということだと思えます。餌がある、天敵が少ない、ねぐらになる樹木が多いなど、様々な条件があるからこそ生物が入り込んできます。水田がトンボの産卵場所として利用されるように、人間生活の営みに依存する生物もいます。こうした背景を踏まえれば、観察場所の認識もまた、多様性の一環を成すことに気付かされるのです。展示で見る標本、野外で見る実物、そして様々な生育環境…すべてを併せて知ることこそ、種々の環境に適応して生息する多様な生物への理解と言えるでしょう。この連載の初回でも、条件の異なる生活基盤もまた、生物多様性に含まれることを説明しました。生物種の多様性に加え、生息場所の多様性もまた、博物館で伝えられる要素であることを認識してもらえたらと思います。自然観察会で養った眼が本当に「観察」する力を持てるよう、今後も根気よく続けていきたいと思うのです。

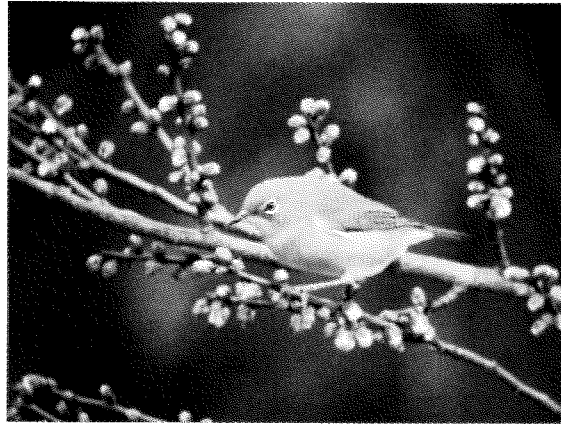
(中村武史)



多摩川の昆虫観察会

写真撮影：影山昇氏

園内はすっかり冬の装いで、紅葉が散り、枝だけになった落葉樹が寒々しい雰囲気を出しています。植物や昆虫は春に向けてエネルギーを蓄えながら、じっと寒さに耐え忍ぶ季節です…おや？木々の間にちらほらと何かが動いています。



梅にウグイス？…本当は近年都会で目立つこの鳥…メジロです

そうです、野鳥たちは、冬も休みなく活動を続けているのです。北から渡って来た冬鳥も加わり、鳥の社会は中々盛況のようです。当館の園内は市街地に造られた人工の森ですが、ここ数年野鳥の種類や数も増えてきました。都市でもっとも身近な鳥といったら何をイメージしますか？カラス？ムクドリ？ハクセキレイ？確かに誰もがよく知っている名前が浮かんできますが…でも最近では意外な野鳥も生活するようになってきたのです。市街地に目立つ野鳥を考えてみましょう。

▼ 都会の新規代表種

普通に考えれば、カラスやドバトと言った種類が筆頭となりますが、今回はそれ以外にスポットを当ててみます。

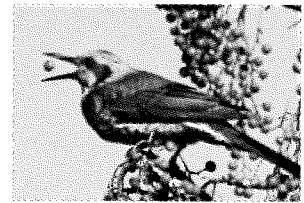
スズメ：何と言っても身近な鳥はこれです。実った米を食い荒らす害鳥のイメージが強いかも知れませんが、反面、作物に被害を及ぼす虫を食べる益鳥でもあります。一年中見られ、市街地から農村まで広く分布しています。人間の暮しと非常に密着し、近くに人家のある場所を選んで棲みかとしています。人口が急激に増えた昭和の時代には、スズメの方が人間の数を上回っていましたが、現



在では激減しているようです。都市環境が変化したことで、隙間の多い木造家屋が減り、マンションが増えたことも原因でしょう。また、都市にカラスが増え、ヒナはおろか親鳥までも襲われる始末…人に依存して市街地をテリトリーとした

いはずなのに、皮肉なものです。

ヒヨドリ：元来、農地や山地に生息する種類ですが、近年市街地で顕著に数を増やしているのはヒヨドリでしょう。基本的には一年中見られる留鳥ですが、冬季に暖地に移動する群れもあります。果実や花の蜜を吸う姿がよく目に止まりますが、人間が設置する給餌台や街路樹に事欠かない市街地はヒヨドリにとって適当な環境でしょう。当館の園内で、北から渡ってくる集団も加わる冬場には、圧倒的に多くの個体を数えます。



コゲラ：こちらは本来、里山や深山の鳥です。80年代以降一年を通して都会に暮らすようになりました。キツツキの仲間なので、巣穴を



掘るのに最適な枯れ木や、生きた樹木の枯枝が意外にも都市に多くあることで定着したものと考えられます。やはり園内でも雑木林や梅園の木に巣を造る姿が見受けられます。

メジロ：もう一種、近年都会の鳥としての印象が強くなっているのはこの鳥かも知れません。

スズメよりもやや小ぶりではありますが、集団で飛んでいる姿を見る機会が多くなっています。本来は山地や平野部の常緑広葉樹・落葉広葉樹に営巣しますが、民家の庭に植えられた樹木に巣をつくることもあるようです。緯度や高度の高い土地に暮らすものは、冬場に南方や暖地に降りてきます。きびきびとした動作でよく動き、木の枝に“ぎゅうぎゅう詰め”でとまっていることもあります。面白いのは、そこから1羽が飛び立つと、隣り合わせた個体が外側から押されるように詰めてあつという間に1羽分の空間を埋め、再び“おしくらまんじゅう”になること。まさに「メジロ押し」と言う表現のルーツです。目のまわりの白い縁取りと、俗に「ウグイス色」と呼ばれる黄緑の体色が特徴です。

▼ 都会の鳥社会

都市に生きる野鳥の共通点は、緑の減少した場所で耐え忍ぶのではなく、あえて自ら好んで入ってきたことにあります。鳥に限ったことではありませんが、生活の上で食物と繁殖は必要不可欠な要素です。市街地を拠点とする鳥は、食物においては雑食性であり植物食です。人間の出すゴミや、公園や人家の給餌が利用でき、市街地に植樹された樹木に実のなる木が多いことも生息に有利な条件と考えられます。繁殖においては、ビニールやポリエチレンなどの人工物が巣材の代用となり、営巣場所にはビルなどの建造物が使われています。本来は、森林や雑木林等に勝る環境は無いのですが、ゴルフ場や住宅・道路などの造成のため、森林が伐採されてやむなく追い出されてしまったという考え方があります。別の森林を求めて移動するものもありますが、都市環境は意外にも彼らに適した条件を揃えていたのです。前述の代用物・代用場所に加えて、街路樹等が成長していたり、公園や神社などに付随する緑もあります。加えて60年代に入ってから鳥獣保護思想の普及に伴い、さらに生息条件が向上したと推察できます。例えば市街地での狩猟禁止、個人の庭先の給餌台設置、都市に植えられた実のなる木の増加等々です。都市化と人が作り出す新たな要素に野鳥が適応したのでしょうか。野鳥にとって、越冬期の食料確保は大変重要な問題です。こうした都市の好環境条件は、個体の生命維持とともに個体

群の興隆に結びつくのです。

また、都市に生活する野鳥種が増えてくると、今までの食性や営巣環境に変化が生じてきます。例えば木の実を主体に採餌するヒヨドリが、ある時期からパン・米・ポップコーンなどを食べるようになったり、地上に降りることはほとんどない習性にもかかわらず、ゴミ箱でミカンやリンゴをあさったり、或いは鉄道の線路上で採餌するようになります。果てはスズメやハトを襲撃したり威嚇したりするシーンにも遭遇します。営巣場所も見つかりにくい所ではなく、庭木や街路樹、植え込み等、わざと人目につきやすい場所を選ぶ傾向となります。人間が近くにいることで、逆に天敵からの防御策を取っていると思わずにはいられません。森では見られない都市独特の野鳥社会が構築されていくのです。

▼ 人工の森にも…

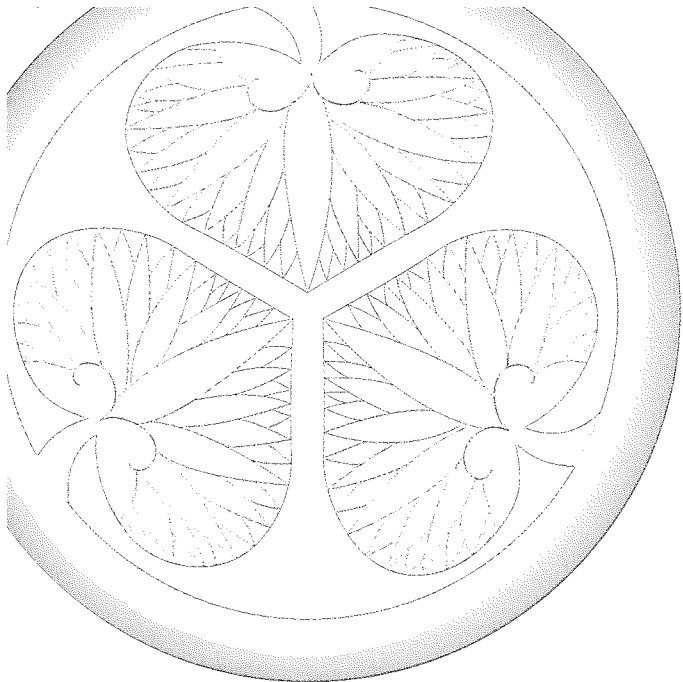
そんな市街地の野鳥が当館の園内にも入り込んできます。ケヤキを筆頭にシイ・カシ・クヌギ・コナラ等の豊富な樹種を配置した園内は、都市に内包された緑地を演出しています。ここ数十年の調査では60種の野鳥が確認され、山地性の鳥や、夏・冬限定の渡り鳥も数多く訪れています。すぐ隣を多摩川が流れていることも大きな要因でしょう。ここに来る鳥はゴミや給餌に加えて、本来の食性に沿った果実や虫の採餌に事欠きません。先に紹介した4種の都市鳥は、特にこれからの季節で、園内を賑わす梅の木に集まることが多く、花の蜜を吸い、木に付く虫を食べ、時には営巣する姿も目立ちます。本来の自然は減っても、適度に人工の自然が加わった都市は決して野鳥の住みにくい場所ではなく、むしろ利便性の高い空間と化しているのです。本来の生態構造が変化する等、諸々の問題を抱えてはいますが…。

ところで梅に止まる鳥と言えばウグイスをイメージしますが、本当に来るのでしょうか…？園内で見られる冬鳥を紹介した展示会を開催しています。ぜひお立ち寄りください。

企画展 **梅にウグイス？**
～郷土の森園内の野鳥～
～4月10日(日)～

古代国司館 と 家康御殿

2011/1/29日～3/13日



府中は古代に武蔵国府が置かれた、伝統あるまちです。府中市域には、古代国府の時代である奈良～平安時代の遺跡をはじめ、さまざまな時代の遺跡が埋もれています。市では積極的に発掘調査を行い、この豊かな歴史を語る情報を蓄えてきました。当館では、こうした成果を市と協力して、毎年、発掘調査速報という形で展示、公開してきました。今回も、最新の情報をお届けします。

最近の調査で大きな注目を集めたのは、何といても、JR府中本町駅前地区の発掘でしょう。この地区では、① 古代の大規模な建物群と、② 江戸時代直前から江戸時代初頭の大規模な建物群などが発見されています。

①は、武蔵国府に都から赴任してきた国司の館と推定されます。

②は、この発掘地が「御殿」「御殿地」と呼びならわされてきたことも考慮すれば、徳川家康が江戸に入府して間もなく、豊臣秀吉を接待するために造営した、府中御殿の跡であることは間違いありません。

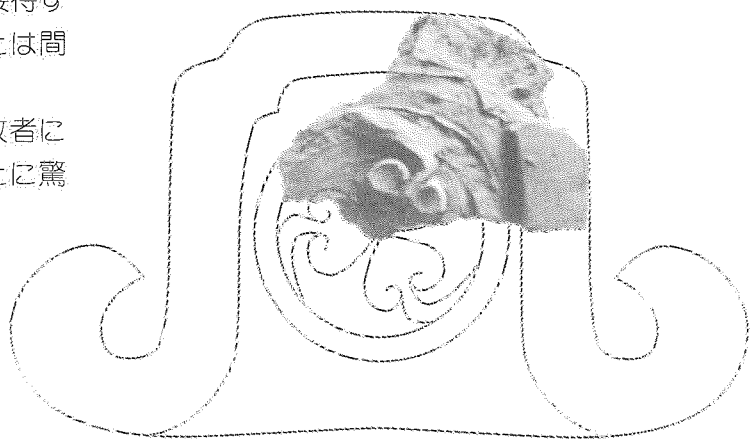
古代と近世の初頭という2つの時代の為政者に関わる遺跡が、同じ場所から発見されたことに驚かずにはられません。

さて、①の具体的成果については、次ページに荒井健治さんが紹介しているとあります。ここでは、②の家康御殿について、ちょっとだけ予備知識を。

上にも述べたとおり、府中に家康が御殿を造営したのは天正19年（1590）8月のことのように。豊臣秀吉が、後北条氏の立

て籠もる小田原城を開城に追い込んだのは同年3月。これを受けて、家康は秀吉から関東への移封を命じられたのでした。秀吉は8月に奥州に向かい、文字通り天下を統一。その帰路の接待のために家康が設けたのが「府中御殿」。まさに、激動の時代に、秀吉と家康が対面した場なのです。そしてその後、府中御殿は徳川将軍が鷹狩の際に宿泊ないし休息する施設となり、また、家康の亡き骸を日光へ送る際にも使われました。

家康はじめ徳川将軍家の御殿は江戸を中心に各地に設けられましたが、発掘調査が行われたのは僅かです。今回の展示では、まだ“掘りたて”ともいえるこの発掘調査を、前年度の調査成果と共に、いち早くご覧いただくこととしました。



三つ葉葵紋の鬼瓦 水戸黄門の印籠でお馴染みの三つ葉葵の紋をあしらった鬼瓦の破片。家康の時のものとは考えにくいですが、徳川家の御殿であることを証明する出土品。

古代の国司の館を発見

本町一丁目 府中市文化振興課文化財係 荒井健治



J R府中本町駅前地区で、国司の館と推定される古代の大型建物群が発見されました。武蔵国府関連遺跡の中央南端部で、国衙跡がある国史跡武蔵国府跡の南西側近接地です。ここは、多摩川の段丘崖（府中崖線）が、南に舌状に張り出す台地縁辺部にあたり、南には「多摩の横山」と万葉集に詠まれた多摩丘陵が、南西には富士山が一望にできる景勝の地です。

近世の地誌には、徳川家康の御殿の跡地という記載のほか、古くは上古官庁の跡、国造の館の地と記されていますが、今回の調査で出土した「口館」と墨書きされた土器や、金銅製の帯金具から、発見された大型建物群が、国造（古墳時代）よりは新しい古代の館であり、館の主が金銅製の帯金具を装着する国司級の人物であることが分かりました。

国司とは、国を治めるため都から派遣された役人で、都の貴族から選ばれていることから、都の貴族の館に近い特徴をもつものと想像されます。都では、貴族の館は総じて宮の近くに建てられており、官位が高いほど宮に近い傾向があります。今回発見された館も、国衙の南西に接する位置にあります。平城京の貴族の館には、若草山を借景として庭を築いているものがありますが、この館の場合も「多摩の横山」や富士山が一望でき、眺望において武蔵国府の一等地に位置しています。

見つかった大型建物群も、東西棟の四面に廂が付く大型掘立柱建物跡（正殿）を中心に、その南側に東西棟の掘立柱建物跡（前殿）、南西側に南北棟の長大な掘立柱建物跡（脇殿）があります。東側は府中街道で削られ明らかではありませんが、東側にも脇殿があれば、都の役所や貴族の館に近い建物配置・規模と言えます。これらの特徴から、国司の館と推定されたわけです。

この国司の館は、出土した土器などから飛鳥時代から奈良時代の初め頃のものと考えられます。この時代、まだ国司の政務の場である国庁は整備されておらず、国司がどこで政務を行っていたかなどが明確になっていない時代です。このことから、国庁が整備される以前の武蔵国府を考える上でも、大変貴重な発見となりました。



「口館」の墨書きがある土器
残念ながら、1文字目は読めない。

収蔵資料あれこれ 🔍

大室政右コレクション

※あるむぜお
イタリア語で【博物館で】
【博物館にて】の意



昨年12月、博物館に質量ともに優れたコレクションが寄託されました。府中市に住まわれた故 大室政右氏が収集された古鏡のコレクションです。府中という地域に直接かかわる資料ではありませんが、大室氏の収集された青銅製の古鏡は古墳時代から江戸時代の各時代を網羅するばかりか、朝鮮半島や中国大陸の製品にまで及び、まさに東アジアの鏡を総覧することのできる内容を持っているのです。

とりわけ、大室氏が精力を注がれたのは江戸時代の柄鏡でした。いまだ整理途上ですが、その数は300枚を超します。全国でも指折りのコレクションといつてよいでしょう。すでにこの柄鏡については、1996年に特別展「江戸の粹一柄鏡」、寄託を受けた後の本年5～6月には企画展「大室政右コレクション① 柄鏡50選」を開催し、鏡の裏に描かれた趣ある図柄や意匠を紹介してきました。さすがに、柄鏡には見応えのある作品が多く、当時の人びとの美的センスを垣間見ることもでき、眺めていて飽きません。

さて、数ある柄鏡のうち上に5枚の柄鏡を掲げてみました。

Aは、中央に「湖州石十五ノ□□銅□□」の銘が薄らと見え、12～13世紀に中国の江南地方

で製作されたものであることがわかります。Bもおそらく同地方の作品で、13～14世紀のものでしょう。平面の地を彫り込んで2羽の鳳凰を浮き出させています。Cは、15～16世紀に朝鮮で製作されたと思われるもの。そしてDが、日本の柄鏡としては初期に属す16世紀の作品です。当時、一般的だった円形の鏡に細長い柄を付けたもので、柄鏡としては不要であるはずの紐を通す鈕を残しているのが特徴です。鈕の下にある「天下一青」の銘から、後に禁裏御用達の鏡師となる青家が製造したこともわかります。Eは、日本で柄鏡が定着した17世紀の作品。鈕はなくなり、円形の画面に、流水に揺れる沢瀉を精緻な筆致で描いています。

このように、大室コレクションでは、日本における柄鏡の成立を、実際にモノを通して迎えることができるのです。大室氏は柄鏡を体系的に捉え、収集していたのでした。この点が、このコレクションの価値を一層引き上げていると言えるでしょう。実のところ、大室コレクションの魅力はまだほかにもあるのです。機会を見て展示公開していく予定ですので、ご期待ください。
(深澤靖幸)